2DB
二次元ドリーム文庫
孤独なビッチ
Lonely Bitch
異世界風俗のモン娘とエルフと魔王和え
小説 上田ながの
挿絵 218
試し読み版

第一章　ラミア娘と尻尾包みレズ風味　006
第二章　ショタ騎士と初物狩り思い出仕込み　038
第三章　ダークエルフとオラ付きもっこり涙味　069
第四章　富豪オヤジと濃い口絶倫ソース　099
第五章　オークの「くっ殺」煮込み　150
第六章　ローパーと丸呑み胎内触手漬け　188
第七章　女魔王とスウィートミックスふたなり添え　218

登場人物紹介

シェリア＝イーノ＝ゴーロック

昼は戦闘服を纏った凄腕の女傭兵。
夜は派手な格好で遊び歩く淫乱ビッチ。

?????

第一章　ラミア娘と尻尾包みレズ風味

ゴフナの街の歓楽街はまさに不夜城だった。既に時計は深夜を回っているというのに、魔術街灯によって照らされた街は、まるで昼間のように光り輝いている。当然街中を歩く人々の数も夜とは思えないほどに多かった。

私――シェリア＝イーノ＝ゴーロックはそんな歓楽街の外れにある娼館区画へと足を踏み入れる。

後頭部で結った薄いピンク色の髪に、紺の上着、胸元とヘソが大きく覗き見えるインナー、そしてホットパンツという格好で……。

（流石大都市……娼館の数も他の街と比べると段違いね）

ずらっと並ぶ様々な娼館。その数は思わず「おおっ」と感嘆の声を上げてしまいそうなくらいに多かった。

街を歩く人々の数も多い。当然私をジロジロ見てくる男達もかなりの数がいた。しかし、私に声をかけてくる者はいない。結構顔には自信がある方だが、私は左目に眼帯をつけている。これがかなりの威圧感になっており、男達を躊躇させているらしい。

（さて、どの店にしようか……）

フムッと私は立ち並ぶ娼館を見つめながら考える。

まず大事なのは女でも入れるかということだ。娼館というのは基本男性向けなので、女性の入店を拒否する店は多い。一体どの店ならば女でも受け入れてもらえるか……。

（この街は初めてだからその辺が不勉強なのよね。えっと……こういう時は……）

キョロキョロと周囲を見回す。

「あったあった」

視界に娼館区画案内所を発見した。私はキョロキョロと周囲を見回しつつ――ないとは思うが、誰か知り合いに見られたら恥ずかしいので――案内所に足を踏み入れた。

ただし、案内所とはいっても中に誰かがいるわけではない。人が二、三人も入ればいっぱいになってしまうような小さな部屋の壁に、娼館の広告が貼ってあるだけだ。

（でも、それがいいのよね）

どんなに剛胆な人間だって、あんまり娼館の出入りというものを人には知られたくない。つまり、できる限り他者に接触したくはないのだ。故に、無人というのは非常に助かる。

（さてと……女性可の店は？）

貼られた店の広告を順番に見ていく。

基本的に広告に『女性も大丈夫です』と書いてあることはない。そういった記載がない店は排除だ。大切なのは広告の段階で『女性も可』と記されていることである。

（……ない。ない。ない……）

見つからない。女性も大丈夫です――な、優良店がない。それどころか、男妾を扱って

いる店も見つけることができなかった。
（王都の案内所だと何枚かあったけど……この街じゃないのかな？　だとすると……今晩は諦めるしかない？　いやいや、それは無理ね）
私は傭兵稼業で食べている。戦場を駆け回り、人や魔物を斬るというのが仕事だ。実力の方は自分で言うのもなんだが、まぁまぁあるとは思う。その辺の男には負けないだろう。
そして今日の昼間も私は戦場で男達を斬っていた。何人もの返り血を浴びている。こういう日は昂ってしまう。興奮してしまうのだ。誰かと肌を重ねたくなる。そして、私はそうした本能に逆らわない。傭兵なんていつ死ぬか分からない稼業だ。やりたいことは我慢せず、好きなようにさせてもらう。そのせいで周りからはビッチ扱いもされているが知ったことではない。
今日の仕事の収入もあることだし、思いっきり散財してやる。
とはいえ、適当な店はなかなか見つからない。
（何処かないの？　どこか……）
ちょっと焦りさえ覚えてしまった。
「――あっ」
探し求めていた『女性も可』と書かれた広告を見つけたのは、そんな時のことだった。
「えっと、店の名前は……」
広告をマジマジと見つめる。

店の名前は『魔物館』。詳しい説明によると――

「モンスター娘を扱った娼館か……」

書かれた文面を、無意識の内に私は口にしていた。

＊

魔物館は娼館区画の中でもかなり中央に建てられた店だった。なかなか年季を感じさせる外観である。どうやら無数にある娼館の中でもかなり古株の店といっていいようだ。

（何処かの店が撤退した後、建物を後から借りたってわけでもないみたいね）

店の外観にはモンスター娘を象ったレリーフがつけられている。それもかなりの年月を感じさせるものだ。まさに老舗という趣である。

（安心はできそうね）

少しホッとする。

こういった店は国や都市がしっかり管理しているところもあれば、裏社会の連中が管理しているところもある。中には当然、客をカモと見てぼったくってくる店もかなりの数存在していた。

ただ、そういう店は長続きしない。すぐに摘発されるからだ。つまり、老舗ということはそれだけで安心ということなのである。

ただ、だからといって簡単に店に入れるわけではなかった。

私は魔物館を横目で見ることができる位置で、立ち尽くす。店を見たり、目を逸らした

り、店に向かって歩き出そうとしたり、やっぱりやめたり――我ながら挙動不審なことこの上なかった。

そうなってしまう理由は簡単だ。初めての店というのは入りにくいからである。何度も通っている慣れた店ならばまだしも、これから開拓する新規店に足を踏み入れるというのは結構勇気がいるのだ。もし店に入って「誰だ？」みたいな目で見られでもしたら……。考えるだけで心臓がドキドキしてしまう。

十歳で傭兵を始め、処女を十二で捨ててからだいたい十年――私は立派な娼館のヘビーユーザーとなっていた。通った娼館の数は二桁を数える。抱いた――抱かれたといった方が正しいか？　――娼婦や男妾の数は三桁に近いと思う。

でも、それでも、やっぱり緊張するのだ。初めての店というのは……。どうしてもドキドキしてしまう。

（やっぱりやめようかなぁ）

店の前まで来てるというのに、そんなことを考えてしまう。店に対して背を向けようともしてしまう。

（しかし……ムラムラしてるんだよなぁ）

我慢はできそうにない。

やっぱり店に……。ああ、でも……。

（店の情報がもう少しあればなぁ）

魔物館を見つめながらそんなことを考える。
店からプレイを終えたらしい客が出てきたのは、ちょうどそんなタイミングのことだった。二人組の男が幸せそうな表情を浮かべている。
「やっぱりここ……最高だな」
剣士風の男が呟く。
「ホントだよ。ここナシの生活なんてもう考えられない。この街で――いや、この国で一番の娼館だな。ここに通うためなら借金したって構わないって本気で思うよ」
魔術師風の男が頷く。
「まったくだな」
語り合う二人は笑顔だった。店での行為に相当な満足感を覚えていることは間違いないだろう。
「……よし」
私は自分に言い聞かせるように呟くと、一度大きく息を吸い、店に向かって歩き出した。

＊

（へぇ、思ったより綺麗ね）
魔物館の外観は年代を感じさせる――悪く言えばちょっと汚らしい――ものであったが、内部は想像していたよりもずっと清潔感に溢れていた。
（建物自体を直すのは大変でも、中は掃除次第でなんとかなるってことか）

「いらっしゃいませ」
やくたいもないことを考えていた私に、店のボーイらしい男が声をかけてくる。
（私を見て動じる様子はナシね）
私をごく普通の客として扱っているようだ。やはりこの店は当たりだったと改めて思う。
女も客として受け入れてくれる娼館は数こそ少ないものの、皆無というわけではない。ただ、だからといって女性客が頻繁に出入りしているというわけではない。そのため、客として赴いても、驚かれたり、胡散臭（うさん）がられたりすることは珍しくなかった。けれど、この店はそういうことがない。それだけ、従業員に対する教育が行き届いているのだろう。ちょっと気分がいい。
「予約などはしていないけど大丈夫かしら？」
一応確認しておく。
一部の高級店の場合、予（あらかじ）め魔術通信で予約を入れておく必要があるからだ。
「大丈夫でございます。さぁ、こちらへ」
ボーイの返事にホッとしつつ、彼に案内されるがままに客の控え室へと移動する。完全個室だ。これなら他の客を気にする必要はない。
（至れり尽くせりね）
控え室内のソファに腰を下ろす。フワッと柔らかな感触が伝わってきた。かなり高そうなソファだ。高級品と評判のアレグロ製かも知れない。

「お手ふきでございます」
「ありがとう」
温かなタオルが手渡される。私はそれで掌を拭った。男の中にはこれで顔を拭く連中もいるらしいが、その気分はどうも私にはよく分からない。
そうして手を拭いている私にボーイは飲み物の注文を尋ねてくる。一瞬酒というのもいいかなと思ったが、あまり酔った状態でのセックスは好きではないので、取り敢えず熱いお茶にしておいた。
一度ボーイは控え室を出て行く。それから数分――お茶を持って戻って来た。いや、茶だけではない。何枚かの紙をボーイは手にしている。
「それではお客様、現在お相手できる娘はこちらの三人になります」
そう言って私に紙を見せつけてきた。
紙には娼婦――モンスター娘の姿が描かれている。
（真を写す――真写の術か……）
映し出したい光景を紙などに完全に再現することができる魔術によるものだ。結構な数の娼館で採用されている術である。
真写へと視線を落とす。数はボーイの言葉通り三枚だ。
一枚目に写っていたのは凛とした印象のケンタウロス娘だ。私にちょっと似た切れ長の目が特徴的というべきか。なかなか気が強そうな感じがする。まるで騎乗する女騎士にも

見える姿だった。下半身が馬というのもそういった点を強調している。

二枚目は青白い肌の娘。活発そうな笑顔と、プルプルとしたゼリーみたいな肌が特徴的だ。多分この子はスライムなのだろう。抱き締めたら気持ちよさそうだ。

三枚目はラミアだ。長い黒髪に丸みを帯びた目。大人しそうな感じがする娘である。表情は儚げで、何となく見惚れてしまうような綺麗な顔をした子だった。ブラに乳房は隠されているが、かなり大きいと思う。私と同じくらい――多分Dカップくらいだろう。実に女らしい身体付きといえる。しかし、下半身は蛇だ。爬虫類といった感じの鱗に覆われている。

（ラミアとH！　そういうものもあるのか）

ケンタウロスやスライムは聞いたことがあったが、ラミアは初めてだった。ああいうタイプのモンスター娘も人とHができるのか……。少し感動する。

それにしても、三人とも一目で人間ではないと分かる姿だ。それでいて忌諱を抱かせるようなイヤな感じはない。実際に会って話をしてみたい――自然とそんな感情が膨れ上がって来た。

（でも、問題があるわね）

明らかに人ではない――だからこそ、どんなセックスをするのかが分からない。

「どの子も魅力的で迷ってしまうわね。貴方のオススメを聞かせてもらっても？」

私は素直にボーイに尋ねる。

実を言うとこのボーイにオススメを聞くというのはなかなかリスキーな行為だ。何故ならば、その時暇な、本当に売り処がない地雷嬢を薦められる可能性があるから……。しかし、ここまでの対応を見れば多分その心配はないと思う。

「そうですね。この三人の中でしたら……まず、この子は外れます」

ボーイはケンタウロスの写真を裏返しにした。その点に関しては私も同意見だ。ケンタウロスと同性同士のセックスなんてどうやればいいのか分からない。基本ケンタウロスはバックしかできない魔物だからだ。貝合なんて絶対不可能だし、シックスナインだってできはしない。それでは楽しみようがないというものだ。

「で、残りの二人ですが……こちらに関してはどちらもオススメできます」

「……どちらも？　スライムは想像がつくけど……」

話に聞いたことがあるが、スライムは己の身体すべてで性行為対象者を呑み込むらしい。経験者によると、身体と身体、すべてが蕩けるような感触が心地いいとか……。

「ラミアも女同士って大丈夫なの？」

「はい。問題ありません。ラミアは対象相手を長い尾で締めつけつつ、セックスを行います。その際、相手が男であれば膣で受け入れるのですが、女の場合は、尻尾の先端部を相手女性の膣に挿入します。そして……と、ここから先はプレイしてみてのお楽しみですね」

ボーイはニコッと笑った。

（……対応だけじゃなくて商売も上手いみたいね）

スライムとのセックスも魅力的だが、こんな思わせぶりな言葉を向けられてしまったらラミアの方が俄然気になってくる。答えは決まった。

「それじゃあこの子をお願い」

私はラミアの娘――源氏名ラミーを指名した。

「それでは準備を致しますのでしばらくお待ち下さい」

ボーイが下がる。

「はぁああ……」

私は大きく息を吐くと、ギシッとソファに背中を預けた。

（魔物娘が相手か……。尻尾で締めつけられながらって、どんな感じなのかしら？　なんか想像しがたくて、ドキドキするわね）

人間以外とのセックスが初体験――と言うわけじゃない。実際先日もドワーフとしたばかりだ。けれど、魔物娘というのは初めてである。そのせいか普段よりも緊張を感じた。なんだかそわそわしてしまう。お茶を飲みながら、何度も貧乏揺すりをした。

「シェリー様。準備が整いました」

数十分後、ガチャッと控え室のドアが開いた。

「……ええ」

スウッとボーイには気付かれないように深呼吸をして、私は立ち上がる。因みにシェリーというのは私が娼館を利用する際に使用する偽名だ。流石にシェリアという本名を名乗

る勇気はない。
ボーイに案内され、店内の廊下を進む。角を一つ曲がると、そこに一人の女が立っていた。黒髪に赤いドレスを身に着けた女だ。胸元は大きく膨らんでいる。ドレススカートの裾からは、蛇を思わせる尻尾が覗き見えていた。
「ラミーです。宜しくお願い致しますシェリー様」
微笑みながら私に頭を下げてくる。
（よし。当たりだ！）
可愛らしく、大人しそうな印象の女――実に私好みだ。顔立ちも真写と何ら変わるところがない。店によっては真写に更に魔法をかけ、娼婦の顔をより可愛らしく際立たせるなどということを行うところもあるが、ここはそういう小細工もしていないようだ。まだ何もしていないというのに、またこの店に来ようと私は心の中で誓う。
「さぁ、どうぞ」
ラミーが私の手を取る。その際、大きな乳房を押しつけてきた。柔らかな感触が伝わってくる。実に心地いい。自然と口元がだらしなく歪みそうになってしまう。しかし、そんな顔を晒すのは矜持が許さない――と言うよりも、恥ずかしい。私は慌ててキリッとした表情を作ると、ラミーにエスコートされるがままにプレイルームに入った。
室内はそれほど広くはない。まぁそれもそうだ。ベッドが一つあればいいのだから……。
「ではシェリー様……失礼致しますね」

ラミーの手が私に伸びる。コートが脱がされた。もちろんそれだけではなく、インナーも慣れた手つきで剥がされる。この様子だと女性客も結構来ているのだろうか？　同じ女だから女性ものの服に詳しいという可能性もあるが……。

パッド入りのインナーなので私は下着を着けていない。すぐにプルンッと乳房が剥き出しになった。

「シェリー様……とても綺麗です」

瞳を細め、ラミーは笑った。

（この子……やっぱり可愛いわね。それに、綺麗とか……）

ドキドキと胸が高鳴る。綺麗という言葉に喜びを覚えてしまう自分がいた。

（きっと……というか、間違いなくお世辞なんだろうけど……。そんな感じがまったくしない。心の底から私を綺麗だと思ってるみたいに見える。流石はプロといったところかしらね）

そう考えることで気恥ずかしさを押し隠そうとする。

「下も……」

そんな私の心にどこまで気付いているのか？　ラミーは微笑みを浮かべたまま、私のホットパンツも脱がせてきた。それにより、黒のショーツが露わになる。ちょっと気に入らない点だが、私の尻は鍛えているせいか同年代の女性に比べても結構大きい。そのせいでショーツのゴム紐が腰に食い込んでしまっていた。そのようなスタイルを見られてしまう

ということに、どうしても羞恥を覚えてしまう。
「えっと、その……私みたいな女の客って多いのかしら？」
誤魔化すように尋ねる。
「いいえ、多くはないですね。というか、ほとんどいません」
ショーツに手をかけつつ、質問に答えてくれる。
「やっぱりそうよね。ねぇ、その……実際女同士ってどうなの？　イヤ？」
普段より若干早口になっていることを自分でも理解しつつ、問いを重ねる。
「そんなことはないですよ。というか寧ろ……嬉しいです。シェリー様みたいな綺麗な人のお相手ができるなんて、私、凄く光栄です」
ショーツを下ろしつつ、上目遣いでそんな言葉を……。その表情はやはり笑顔だ。とても嬉しそうな顔である。
（この顔……ヤバいでしょ。なんか……好きになっちゃいそう）
思わず抱き締めたくなるような姿に、キュンッと胸が疼いた。
「ふふ、やっぱり綺麗です」
生まれたままの姿に変えられる。私の全身を見られてしまう。ちょっと陰毛は濃い方だ。私は基本的に露出度が高い格好なので毛の処理はしている方であるが、秘部だけはなかなか難しい。戦場暮らしの弊害というべきか……。
「あ、あんまり見ないでね。恥ずかしいから……」

可愛らしい魔物っ娘に濃い陰毛を見られるというのは、やっぱり恥ずかしい。セックスなんて食事をするように何度だってしてきたことなのに……。

（いつまで経ってもドキドキできる。それがセックスのいいところよね。まぁ、同じ相手とばっかりしてたら、そんなことはないのかも知れないけどさ）

改めてそんなことを思った。

「それではお客様……申し訳ありませんが私の服を脱がせていただいてもよろしいでしょうか？」

「もちろんよ」

ラミーのドレスを脱がす。基本的に私はドレスというものをほとんど身に着けることはない。だが、仕事の関係で例えば貴族の護衛をする際には、夜会などに入るためにそういった衣服を身に着けるような場面だって幾つもあった。そのお陰か、手際よく脱がせることができた。

ラミーの生まれたままの姿が私の前に晒される。乳房は思った通り私と同じサイズだ。ただ、形は結構違う。私の胸はツンとした上向き加減だが、ラミーの乳房は丸みを帯びたお椀型だった。乳輪と乳頭もどちらかと言えば大きめだ。

腰回りは人間の女よりも遥かにキュッと括（くび）れている。多少腹筋が割れ気味である私に比べると、実に女らしい肢体といえるだろう。下半身も女を感じさせる作りだ。足の付け根を思わせるような部分があり、人のものとほとんど形が変わらない秘裂を確認することも

できた。陰毛は生えていない。毛が濃い私からするとちょっと羨ましい綺麗さだった。そこまではほとんど人と変わりがない。ただ、それより下は完全に蛇だった。鱗に覆われた爬虫類を思わせる肉体である。けれど、嫌悪感のようなものはない。それどころか、ゆっくりとうねるように蠢く尾が、なんだかとても艶めかしく見えた。長さはだいたい三メートルほどはあるだろうか？　かなりのものである。これからこの尾で締めつけられるのか——そう思うと、なんだか身体が熱く火照った。ジュワアアッと秘部からは愛液が溢れ出す。秘裂がくぱっと左右に開いた。

「……私で興奮してくれているんですね」

種族は違えど、同じ女だからだろうか？　ラミーはすぐに私の変化に気付く。

「あ、これはその……」

慌てて下半身に手を伸ばし、秘部を隠そうとした。

「ふふ、嬉しいです」

そんな私をギュッとラミーが抱き締めてくる。乳房に乳房が押しつけられた。柔らかな胸と胸の形が変わる。トクンットクンットクンッというラミーの鼓動と、温かな体温が伝わってきた。

「どんな風にしたいですか？」

身体を密着させたまま、尋ねてくる。

「……実を言うと魔物娘とするのは初めてなのよ。だから……貴女に任せるわ」

柔肌の感触に体温が上昇するのを感じつつ、私は素直に答えた。
「はい。承りました。では……いきますね」
そう言うとラミーは私に口付けしてきた。唇を重ねるだけのキスじゃない。チュッチュッチュッと幾度か唇を押しつけてきた後、私の口内に舌を挿し込んできた。
「はっちゅ……んちゅっ……ふっちゅ……んちゅううっ」
もちろんただ挿し込むだけではなく、舌を蠢かせて掻き混ぜてくる。グチュグチュという、ともすれば下品ささえ思わせる音色が響いた。
（この舌……思ったより長い）
人間の舌よりも遥かに長い。それに、舌先は二股に割れていた。どうやら舌は蛇に近いらしい。
（普通の舌じゃ届かないほど奥にまで入ってきているわね。私の喉奥……食道のあたりまで舐め回してくる。なんかこれ……新感覚……。悪くはないわね）
舌の動きに比例するように膨れ上がってくる愉悦に、身体が包み込まれていく。自然と全身から力が抜けていった。
そんなタイミングを見計らったかのように、ラミーの尻尾が動き出す。長い尾が、私の肢体に巻き付いてきた。肌を締めつけてくる。腕ごと胴を縛り、腰回りをキュウウッと圧迫し、両太股を拘束してきた。全身を蛇の尾で、搦め捕られる。
（結構……きついかも……）

「貴方はホストよ。お客様をいい気分にするのが仕事よね？　なのに、今日、私はいい気分どころかかなりストレスを感じさせられたのよね」
だから、ストレスの解消をさせてもらうと告げる。
「ストレス解消？」
「もちろん……こうするのよ」
言葉ではなく行動で疑問に答える。私はナオの身に着けていたスーツに手をかけると、それを容赦なく剥ぎ取っていった。
「な……なんのつもりだこれは!?　貴様……何をしている？」
ダークエルフが戸惑いの声を上げる。
「ちょっ！　や、やめろっ!!」
私の手から逃れようと身を捩ろうとする。
「ん？　あ……なんだ？　これ……動かない。俺の身体が動かないっ!?」
そこでナオは自分の身に起きている本当の異変に気がついた。
「なんでだ？　どうして動けない？」
僅かに身体を左右にくねらせる程度のことはできる。けれど、彼の身体は完全にベッドの上に固定されていた。
「いわゆる魔術というものを使わせてもらったのよ。貴方の身体の自由は奪わせてもらったわ」

えっちシーン試し読み ここからスタート!

「――なっ！」
「そういうわけだから抵抗は諦めてね」
常に人間を下に見ているエルフという種族に、抵抗できずに散々身体を嬲られる屈辱というものを教えてやろう。
そんなことを考えながら、私はナオを裸にした。
「どういうつもりだ？　俺に魔術をかけて何をする気だ？」
ギャアギャアと五月蠅いが無視して、露わになった褐色の肢体を観察する。
（胸板は薄いし、手足もかなり細いわね）
流石に先日相手をしたカールほどではないけれど、かなりの痩せ型だ。やはり私のタイプじゃない。もっと筋肉質な方がスタミナ的にも楽しめるわけだし……。
（でも、ちんぽの方はなかなかね）
長さは十五センチ前後といったところで太さも指三本分はありそうだ。まだ勃起していないので正確なところは分からないが、多分それくらいで間違いないだろう――勃起後の大きさ予測は私の特技の一つだ――。
（及第点はあげられるわね）
もう少し大きい方がやはり好みだが、少しは満足できるかも知れない。
「おい！　聞いているのか!!　俺は何をするつもりなのかと貴様に聞いている！」
「何って……もちろん、貴方を犯すのよ」

苛ついた様子のダークエルフに、事も無げに言ってやった。
「――は？」
エルフの細目が見開かれる。
「お、犯すって……本気か？」
信じられないといった表情だ。女の口からそんな言葉が出るとは思いもしなかったのだろう。
「もちろんよ」
あっさりと答える。
いや、ただ頷くだけでは終わらない。私は自分が身に着けている服に手をかけると、躊躇いなくそれを脱ぎ捨てた。上着を放り投げ、インナーを外す。剥き出しになる乳房。たゆんっと胸を弾ませながら、ホットパンツとショーツも下ろした。ナオの前に秘部を晒す。露わになる秘裂。既に左右に開いている。ピンク色の肉襞が覗き見えていた。当然のように、花弁の表面は愛液でしっとりと濡れている。やると決めた時から、私の身体は既に興奮状態にあった。
「ふ、ふざけるな！　そんな……屈辱的なことっ！」
この男はわざわざ枕営業を仕掛けてきたくらいなので、多分エルフの中では性欲が強い方なのだろう。ダークエルフだからだろうか？
ただ、女に犯されるというのはやはり矜持が傷つくらしい。エルフというのはどうしよ

うもないほどに誇り高い種族なのだ。その辺りが本当に面倒臭い連中である。
「悪いけど抗議は却下よ。私はもうするって決めたの。一度決めたことを覆すつもりはさらさらないわ」
ダークエルフのペニスに触れた。
「くっ」
ヒクッと肉棒が震える。
（思った以上に敏感みたいね）
「ちょっと触っただけなのに……感じすぎ」
小馬鹿にするように笑ってみせた。
「な……ば、馬鹿にするな！　人間に……下等生物如きに触れられて気持ちよくなどなるはずがないだろ！　気分が悪いだけだ！」
当然のようにダークエルフは快感を否定する。
（下等生物ね。これだからエルフは……）
昔の男もよく自分や他の人間を下等生物と呼んでいた。異常なこの状況に地が出ているらしい。
あいつとの記憶が蘇ってくる。ちょっと腹立たしい。私はムカムカとしたものを感じつつ、苛立ちをぶつけるように「これでも？」と、薄笑いを浮かべながら、肉棒をゆっくりと扱き始めた。強すぎず、弱すぎず、我ながら絶妙な力加減で肉茎を握りつつ、シコシコ

と上下に扱く。もちろんただ擦り上げるだけでは終わらない。時には指先でカリ首をくすぐるように刺激し、時には肉先秘裂を上下になぞり上げたりもした。
「あっは……ふはっ！　な……なんだ……こんな……くっ！　う、上手いっ！　あっあっ……うぁああっ！」
そうした愛撫に対し、ダークエルフは敏感に反応する。まるで少女のような喘ぎ声を聞かせてくれた。当然喘ぐだけでは終わらない。肉棒を勃起させる。私の手の中で硬く、熱く。大きさはやはり私が想定した通りだ。
「あらら、簡単に大きくなっちゃったわね」
クスクスと笑う。
「な……ちがっ！　これは……違う！　違うんだっ!!」
勃起という事実に、ダークエルフは褐色の肌を恥ずかしそうに赤く染めながら、首を必死に左右に振り、否定の言葉を口にした。
「何も違わない。貴方は感じてる。こうやって私に……貴方が言う下等生物にちんぽをシコシコされて……凄く気持ちよくなってる」
「ふざけたことを言うな！　獣相手に反応するなど……」
遂には獣とまで言い始めた。
エルフにとって人間とは本当に野山を駆け回る獣と変わりがないらしい。
（獣姦は嫌いじゃない――とかあいつ、よく私に言ってたっけ……。ああ、もう……ムカ

つくわね）

嫌な記憶ばかりが蘇ってくる。

ムカムカとイライラに心が満たされていった。

しかし、それを表に出すことなく、私は笑う。

「獣相手か……。それでちんぽ大きくするとか……貴方ってもしかして、とんでもないド変態か何か？」

微笑みながら、敢えて煽るような言葉を口にする。

「変態？　俺が？　貴様！　人間如きがこの俺を変態などと！」

「でも、事実でしょ。ほら、キミのちんぽ……凄く熱くなってる」

「だから……感じてなんかいないっ!!」

否定を重ねてくる。

けれど、掌に伝わってくる熱気や、ドクッドクッドクッという脈動はかなりのものだった。数度扱いただけでしかないというのに、既に肉先からは先走り汁まで溢れ出している。半透明の汁が私の掌を濡らす。ねっとりとした粘液。濡れた状態で肉茎を扱くと、グチュッグチュッグチュッという淫猥な水音が響いた。

（ああ、これだ。確かにエルフのちんぽだ）

エルフは性に対して淡泊なくせに、体液量は非常に多い。

（多分子供を作るためね）

ほとんどエルフはセックスをしない。故に、一度のセックスで相手を妊娠させる確率を上げるのだ。精液を濃くすることによって……。

（まぁ、人間とエルフじゃ種族が違うから妊娠なんてあり得ないんだけどね）

人間との混血であるハーフエルフなどあり得ない。そんなもの、お伽噺の中だけの話だ。

（って、そうか。こいつとしても私は妊娠しないのか……。それは悪くないわね）

気兼ねする必要なんかまるでないというわけだ。

普段のセックスでは、行為の後に魔術で膣を洗浄している。そうすることで避妊しているのだが、結構あれは面倒臭い。だから、できる限り膣中（なか）出しは避けたいところなのだが、今回はそうする必要はなさそうだ。

「こんなにグチュグチュになるほど汁を出しておいて感じてないとか……説得力がないわ。つまりキミは変態ということで間違いないのよ」

挑発を重ねる。

「違うっ！　違うっ！　違うぅぅぅぅっ!!」

必死に否定の言葉を重ねる。けれどその顔は今にも泣き出しそうだった。気位が高いからこそ、追い詰められると弱いのだろう。そんな姿になんだか胸がスッとするのを感じつつ、同時に私はもっとこのダークエルフを苛めてやりたいと思った。そうした思いに私は逆らうことなく、肉棒に手を添える。ゆっくりと褐色の身体に跨がった。

「――な、お前……何を……何をする気だ!?」

サーッとダークエルフの顔から血の気が引いていく。
「何って……キミの想像通りのことよ」
何を考えているのかくらい、手に取るように分かった。
「な……やめっ！　やめろっ！　それはやめろっ！　それだけは……やめろぉ」
必死の懇願だった。眦からは涙さえ流しながら、やめてくれと繰り返す。ここに到着した時はヤル気満々だったくせに、攻守が入れ替わっただけでこれとは……。不様なことこの上ない姿だ。多少可哀想だったかな？　とも思う。しかし、何を訴えられたところで聞く気なんかない。
「ごめんなさいね」
一言だけ謝罪すると共に、私は腰を落とした。グチュッと膣口で肉先にキスをする。花弁にペニスの熱気が伝わってきた。ただ触れただけでしかない。けれど、一瞬全身がビクンッと震える。甘く痺れるような性感が身体中を駆け抜けていく。思わず私は「んっふ」と声を漏らした。
（熱量は問題なし。寧ろジンジンッて感じが心地いいわ。もう少し大きい方が好きだけど、これはこれで悪くないわね。それじゃあ次は形の方を確認させてもらうわよ）
伝わってくる熱に反応するように、膣口からジュワアアッとより多量の愛液を分泌させながら、私は腰を落としていく。膣口をクパッと開き、ズブズブと亀頭を呑み込んでいった。

「ふっは……あはっ！　んっんっんっ――くっふ……んふううっ」
広げられていく。肉壺がペニスの形に拡張されていく。襞の一枚一枚が亀頭に巻き込まれ、奥へ奥へと進んでいく。
（思った以上にカリ首が開いてる。それに……想定よりも少し長いかも……。思った以上に奥まで届く。これなら一番欲しいところまで届きそうね）
つまりは子宮口だ。私は子宮口に亀頭でキスをされるのが大好きなのである。更にペニスを咥えていく。太股をヒクヒクと震わせ、肌を汗で濡らしながら、私はドジュンッと子宮口を亀頭に押しつけた。
「あっは……届くっ！」
思わず声を上げてしまう。条件反射のように、キュッと膣壁が収縮した。これまで以上に強くペニスを締めつける。襞の一枚一枚でギュウウッと搾るように肉茎を刺激した。
「くっは！　はぁああっ！」
ぶびゅばっ！　どっびゅ！　どびゅううう！　どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅ――どっびゅるるるるぅ!!
「え？　あっ……んくっ！　あっは……ふはぁああ！」
まるで条件反射のように射精が始まったのはその瞬間のことである。私の子宮にドクッドクッドクッと熱汁が流れ込んできた。
（熱い！　くっ……これ……染みる。んんんっ……やっぱり……濃いっ！）

子宮壁にザーメンが染み込んでくるのが分かる。液というよりもゼリーと言った方が正しそうなくらい、白濁液は濃厚だった。まるで膣が火傷してしまいそうなくらいだ。

（この熱……ホントに熱い。熱気だけで感じる。なんか全身が甘く痺れるような感じ。精液そのものが子宮を愛撫してくるみたい。んんっ……これ、人間に膣中出しされるよりも気持ちいいかも）

何度も言っているが、エルフとは淡泊な生物だ。それは男だけではなく、女にも言えることである。聞いた話によると、エルフの女とは総じて不感症と言ってもいいほど、セックスの際に快感を訴えることがないらしい。

（そっか……それで……精液自体が快感を与えるようになってるんだ。少しでもセックスを続けたいと思わせるように……。そういえばあいつのも……こんな感じで気持ちよかった覚えが……）

昔の男をやっぱり思い出す。確かにあいつとのセックスも膣中出しだけは気持ちよかった。あまりにいけ好かない野郎だったせいで、その記憶さえも忘れかけていたが……。

そんなことを考えながら、ヒクヒクと全身を震わせる。半開きにした口から「はぁああ」と歓喜の吐息を漏らした。

「……こんな……こんなぁああ」

そんな私とは対照的に、ダークエルフは悔しそうだった。歯を食いしばりながら、屈辱に身を震わせている。ああ、実に気分がいい。でもまだだ。エルフに対する憤りはこの程

度では終わらない。
「簡単に射精しちゃったわね。下等生物相手に挿入れた瞬間イッちゃうとか……。幾らなんでも早すぎ。恥ずかしくないの？」
私は更に挑発を重ねる。
「……う、五月蠅い！　そんなことより……俺の上からどけっ！　こ、このビッチめ！」
必死に虚勢を張る。私を強い視線で睨み付けてくる。そうすることでなんとか自分を支えようとするように……。
（この調子ならまだ楽しめそうね。それにエルフって早漏だけど……人間よりも遥かに連射がきくのよね）
それも妊娠させる確率を上げるための種族的特性によるものだ。濃厚な精液を何度でも放てるようにできている。実際、私の膣中のペニスはまるで萎えることなく、勃起し続けていた。
（あいつもそうだった。一度射精したって全然萎えなかった。なのに、いつも一回だけで終わりで……限界まで出してくれたことは結局一度もなかったわね。あの時感じてた物足りなさの分まで、しっかり搾り取ってやろう）
キュウウウッと私は改めて肉壺を収縮させ、勃起したままの屹立を締める。
「ふあっ！　な……これ……締まって！　お、お前……ふぐうう！　なにを⁉　終わり……出したんだから終わりじゃないのか？」

「何を馬鹿なことを言ってるのよ。キミのちんぽ……まだこんなに硬いじゃない。キミが萎えるまで、私はセックスをやめないわよ」
「なっ！　ふ、ふざけるなっ！　俺はこれ以上などっ！」
「……答えは聞いてない」
微笑むと同時に私はピストンを開始する。もちろん手加減なんかしてやらない。最初から全力全開だ。ヒダヒダをきつく肉茎に絡ませながら、パンパンパンパンッという腰と腰がぶつかり合う音色が響くくらいの勢いで、尻を振りたくった。
「あっ！　くっは！　うはっ！　うぁああああっ！」
「んっふ……あっあっあっ……んふうう……。ふふ、その顔、なかなか気持ちよさそうね。無理矢理犯されて感じているのかしら？」
グラインドに合わせて喘ぐダークエルフを嘲笑う。
「ちがっ！　だから……俺は……感じなんか……」
「これでも？　ほら、こうされてもまだそんな戯れ言を続けられる？」
ただ腰を上下に振るだけでは終わらない。強く腰を押しつけつつ、時には左右にくねらせたりもする。それと共に子宮口をクパッと開くと、亀頭に吸い付かせた。ジュルルルルッとそのまま吸引する。子宮そのもので精液を吸い出そうとした。
「はあっ！　だ……め！　で……出る！　ああっ！　射精るぅうう！」
そうした行為にダークエルフはどこまでも過敏に反応する。

どっぴゅ！　ぶびゅっ！　どっぴゅうううううっ!!

「はふっ！　くっふ……あっあっ……また……出てる。熱いの……精液……私のま○こにビュルビュル流れ込んでくる。あっあっ……んっは……んぁあああっ！」

あっさりと二度目の射精を開始した。私の肉壺に再び白濁液を流し込んでくる。

（この量……一度目とほとんど変わりがない。それに、熱さや濃さも……。ぷるぷるで活きのいい精液が私の膣中（なか）で飛び跳ねてるみたい。身体が溶けちゃいそうなくらい感じる。これ……最高ね）

またしても子宮内に広がる熱気。同時に性感が弾けるように広がっていく。私はダークエルフの胸板に爪を立てながら、全身をペニスの痙攣に合わせるように小刻みに震わせた。

「はぁ……あああああ……」

エルフも熱い吐息を吐く。その表情は誰の目から見ても明らかなほど、肉悦に蕩けたものとなっていた。顔立ちがいいせいか、なんだか可愛らしささえ感じさせる表情だ。悔しがっている顔もいいが、こういうのもなかなか悪くはない。もっと見たいと思う。

「さぁ、まだまだよ」

だから終わらない。二度の射精程度で私は満足などしない。

「ほら、もっとよ。んっふ……あふんんっ……もっと……感じさせなさい。私にキミの精液を流し込むのよ。ほらっ！　ほらっ！　ほらっ」

どっちゅ！　ぐちゅううっ！　どっちゅどっちゅどっちゅどっちゅどっちゅ！

第五章　オークの「くっ殺」煮込み

私はまだガーラの街にいた。フィズロとの一件のお陰でまだまだ懐に余裕があったから魔獣退治を行っていた。今日の昼間も数匹のオークを斬ったばかりである。

そのせいか、やっぱり興奮してしまっている。我慢をするつもりなどさらさらないので、今日も街の娼婦区画へとやって来た。仕事終わりに直行なので、本日は戦闘服姿だ。

（今日もサイレントに行くか）

数日滞在していたお陰で、馴染みの店というのもできている。

娼館『サイレント』――男妾も扱っている店だ。何度も通っているので安心して足を踏み入れることもできる。そういうわけで私は店へと足を向けようとして、ふと立ち止まった。

（なんかちょっと違う気がする）

サイレントは特に変わったところのないオーソドックスな店である。プレイ内容も、まずは一緒に風呂に入り、その後ベッドでセックスという実に普通なものだ。

（普通が嫌いってわけじゃない。やっぱり王道ってのは大事だから。ただ……）

今日は普通のセックスがしたいという気分ではない。もう少し変わったプレイを楽しめ

つちシーン
試し読み
ここからスタート!

ないものだろうか？

「んっ？」

そんなことを考えながら娼婦区画を歩いていると、その店が目に入った。

（イメクラシリア？）

看板に書かれている店名を確認する。そのまま説明文へも視線を向けた。

『当店ではお客様の要望に添ったプレイを多数用意しております。痴漢プレイ、強姦プレイ、ラブラブ恋人プレイ……ｅｔｃ．』

（へぇ、こんな店もあったのね）

イメージプレイが楽しめるというわけか。

（ちょっと気になるわね。ただ……女でも……ああ、大丈夫そうね）

説明文には女性も歓迎しております――と書かれていた。

（初めての店ってのはちょっと緊張するし、なんか胡散臭い店だけど……）

店の外観はかなり新しい。最近できたばかりのようだ。新規店というのは少し怖い。流石に入店を躊躇ってしまう。

（でも、まぁたとえぼったくりだったとしても、今の私は結構余裕があるし……）

イメージプレイというものに非常に心が惹かれる。

（よし、思い切ってみよう）

緊張しながらも店に足を踏み入れた。

「いらっしゃいませ。ご予約は？」
すぐにボーイが出てくる。
（受付は合格ね）
そんなことを考えつつ、予約はしていないが大丈夫かと尋ねる。
「問題ございません。ただ、プレイの準備というものがありますので、予めこちらが用意したコースから選んでいただくことになりますがよろしいでしょうか？」
つまり、予約をしておけば、その際にしたいプレイを指定することができるということだろう。かなり興味深い話だ。とはいえ、今日は予約ではないので諦めよう。
「それで構わないわ」
「ありがとうございます。では、こちらへどうぞ」
そのまま控え室へと案内された。
（う、ちょっと気まずい）
控え室はかなり広い部屋だった。ゴフナの『魔物館』のような個室ではない。そのため、他の客とも顔を合わせることになってしまう。
（この辺は減点ポイントね）
ジロジロと見られる。待合室にいるのは男ばかりだ。女ということでかなり興味を惹いてしまっている。思わずため息をつきそうになりながらも席に座った私に、ボーイはメニューを差し出してきた。

「現在すぐに私達が用意できるプレイはこちらになります」
メニューへと視線を落とす。
（痴漢プレイ、強姦プレイ、ラブラブ恋人プレイ――看板に書かれていた通りの内容ね。へぇ、女の場合だと、痴漢される方とか、強姦される方も選べるんだ）
メニューの横には娼婦と男妾の真写も貼られている。
プレイによって相手は決まっているらしい。
（固定ってのはちょっと残念ね。色々組み合わせてみたいんだけど……。ただ、女でも男女両方選べるってのはなかなか気が利いてるわね）
女性同士も受け入れてくれているというのはなかなか懐が深い店だ。
「これは……」
メニューの中に気になる項目を見つけた。
（魔物プレイ？　へぇ、ここも魔物娘を扱ってるんだ。って、魔物娘だけじゃないわね。牡の魔物まで用意されてる。オークだけだけど……）
プレイ内容はオークによる輪姦敗北エッチ『くっ！　殺せ！』と書いてあった。説明文によると――
『旅の途中で魔物に敗れ、集団陵辱される気分を味わえます。もちろん、安全は保証済み』
とのことらしい。
（そういえば……）

説明文を読んで思い出す。以前、傭兵仲間の一人――女戦士テミスに聞かされた話を。

『正直女でソロ傭兵ってのはあんまりあたしはオススメしないな。なにせ危険だ。もちろん、シェリア……腕に自信があるってのは分かる。でもな、戦いってのは時の運だろ？そして敗れた時、あたし達女ってのは悲惨だ。あたしも前にゴブリン共に負けて……』

散々陵辱されたことがあると聞かせてくれた。

今にも泣き出しそうな顔で、テミスは最低な思い出だと言った。

けれど、彼女が浮かべていたのは辛そうな顔だけじゃなかった。確かに瞳は潤んでいたけれど、その頬は紅潮し、半開きになった口からは熱い吐息が漏れ出ていた。

つまり彼女は興奮していたのだ。輪姦された事実を思い出して……。

それだけ魔物という存在に無理矢理犯されるという事態に、快感を覚えていたということなのだろう。

あの話を聞いて以来、私は一度でいいからテミスが体験した快感を味わってみたいと思うようになった。

ただ、だからといってそれを実行することはできなかった。理由は単純に危険だからである。犯されるだけならばいい。しかし、最悪の場合は命を落としかねないのだ。というか、命を落とす可能性の方が遥かに高い。テミスが助かったのだって偶然の産物である。陵辱の後、ゴブリン共の棲家に連れて行かれそうになっていたところを、通りかかった傭兵団に救われたとのことだ。それがなければきっと死んでいただろう。

そういうわけで軽々に魔物に犯されるわけにはいかないのだ。
（でも、ここならそれを楽しめる？）
改めて輪姦敗北エッチの内容を確認する。
（プレイになれたオーク二匹による休みない輪姦……か）
昼間斬ったオーク達を思い出す。奴等は私を犯そうと戦闘中であるにもかかわらず、ペニスを勃起させていた。長さはだいたい五十センチ。挿入れられたらきっとヘソの辺りまで届きそうなものだった。太さも私の太股くらいはあったと思う。あんな肉棒に犯されたらどれだけ気持ちがいいだろうか？
（あっ……想像しただけで濡れてきちゃったわね）
都合よく戦闘服を着たままなので、かなり気分も乗るような気がする。
（よし、決めた）
「それじゃあ、この……りんか――」
言いかけたところで私は一度言葉を切る。
理由は視線を感じたからだ。周りの男達の視線を……。
彼らは皆澄ました顔をしている。他人になんか興味ありませんって表情だ。けれど、明らかに彼らの意識は私へと向いていた。私がどんなプレイを注文するのか――気になって気になって仕方ないらしい。
私はフウッと肩を竦めると「これでお願いします」とメニュー表を指差した。

「輪姦敗北エッチですね」
だが、ボーイはそんな私の気遣いなど無視するように、注文を復唱する。
（……減点ね）
やはり新規店か……。ボーイの教育というものがなってない。

＊

「では、こちらでございますお客様」
ボーイに案内され、私はプレイルームへとやって来る。
「この扉を開いた瞬間から、プレイの開始でございます」
「分かったわ」
頷くと私はプレイルームのドアを開いた。
（へぇ……これはなかなかね）
室内に入り、私は感心する。
まるで洞窟内部にいるかのような部屋だった。壁や地面、天井は岩に覆われている。
（違う。ただの岩じゃないわね。結構柔らかい）
足に伝わってくる感触はマットを思わせるものだ。多分マットに魔術をかけ、見た目を変えているのだろう。
（本物の岩を使って客が怪我をしないようにっていう配慮かしらね。まぁ、偽物とはいえ、なかなか臨場感があるわ）

これならプレイの方も期待できるかも知れない。
そんなことを考えている私の前に――
「女……犯す」
「孕ませる！　ま○こに種付けする！」
二匹のオークが現れた。
彼らは腰巻きをしているが、その上からでもはっきり分かるほどペニスを勃起させている。肉棒を硬くたぎらせながら、ギラギラとした視線を私へと向けてきた。
（やっぱり大きいわね。あんなの本当に挿入るのかしら？）
腰巻き越しでも分かる。人間とは比べものにならない逞しさだ。性器というよりも凶器に見える。昼間斬ったオーク達に勝るとも劣らないペニスだ。あんなものを挿入れられたら身体が裂けてしまうのではないか？　とさえ思えるレベルである。
「私を簡単に犯せるとは思わないことね」
肉棒の逞しさに私は思わずゴクッと息を呑みつつも、店が予め用意してくれた模造刀を構えた。
「抵抗する気か？　そういう女……嫌いじゃないぞ」
「気の強い女をヒイヒイ言わせる。考えるだけで射精しそうだ」
言葉と共に強烈な瘴気をオーク達は全身から噴出させた。
（棒読みだったらどうしようかと思ってたけど、演技は合格ね。本気のオークを前にして

るみたい）
流石はプロというべきだろうか？　緊張感さえ覚えるレベルだった。
「私を……舐めるなっ!!」
瘴気のせいで、肌がヒリつくような感覚を覚えつつ、私は走り出す。模造刀を構え、オーク達の中に飛び込んだ。
剣を振るう。オーク達を倒すために……。
「遅い！　遅いぞ!!」
だが、オークに私の剣は届かない。まぁ、ほんとわざとらしく「やぁあああ！」と棒読みで剣を振ってるのだからそれも当たり前だ。演技に関しては私の方に非常に問題があるといっていいだろう。
しかし、オーク達はそれをまるで気にすることなく、私の腕を掴むと――そのまま私の身体をプレイルームの床に押し倒してきた。
「あぐっ！　ぐうううっ!!」
「弱い。弱すぎるぞ。この程度の力で俺達を倒す気だったのか？」
「馬鹿な女だ。お前がどれだけ愚かか――身体に教えてやろう」
オーク達が私を見下ろす。
（このわざとらしいイメージプレイ！）
でも、それがいい。

「たっぷり膣中出ししてやるからな」
ビクビク震える肉茎を突き出してきた。
「俺達オークはどんな種族の女でも孕ませることができる。知ってるよな？」
「種付けしてやる。子宮の中に直接注ぎ込んでやるぞ」
（臨場感はたっぷりね）
本気で恐怖さえ覚えるレベルといっていいだろう。
が――
「ただ、子宮陵辱はオプション扱いで、追加料金が必要になるがな。ああ、そうだ。因みに俺達はパイプカットをしているから、本当に妊娠する必要はないぞ」
この台詞にはちょっと――というかかなり興醒めだった。
（そういうのはプレイ前に選んでおくんじゃ駄目なの？　って、まぁ仕方ないか）
子宮陵辱というのはかなり気になる。多分膣だけではなく、ソレより奥まで私を蹂躙してくれるのだろう。
「お……オプション……頼むわ」
「畏まりましただ……お客様ぁ」
ニタアアッとオークが笑う。その笑みは見る者に恐怖を感じさせるケダモノの笑みだった。台詞のお陰で結構台無しだが……。
（いや、今はプレイに集中だ。集中！）

イメージプレイに大事なのは、いかになりきるかだ。
「わ……私を犯すだと？　くっ……そんな屈辱……。殺せっ！　私を殺せっ！」
棒読みだがそれっぽい台詞を口にする。
「ダメだ。お前は俺達の孕ませ袋になるんだ」
もちろん、私の言葉でオークが止まるはずなどなかった。
「犯す。孕ませる。たっぷり……流し込む」
そんな台詞を口にしつつ、倒れた私の身体を、ヒョイッとまるでオモチャでも扱うように抱き上げてきた。
「は……なせっ」
本当は放してくれなどとは思っていない。それでも敢えて抵抗してみせる。オークの腕の中で藻掻きに藻掻いた。
「お客様……もう終わりだ」
私の抵抗を嘲笑いつつ、オークは戦闘服の腰当てを容赦なく剥ぎ取ってきた。下着が剥き出しになる。色は紫だ。もちろん、そんなショーツも簡単に引き剥がされてしまった。ビリッと破り捨てられる。因みにこのショーツは予め店が支給してくれたものだ。結構気が利くところもある店だと思う。
秘部が魔物の前に剥き出しとなる。
「挿入れる。挿入れる。挿入れるっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/